

モモシクイガ加害りんごを見逃すな！

農林総合研究センター りんご試験場 病虫肥料部

モモシクイガの幼虫はりんごの果実内部を食害するため、被害果は生食用のみならず、加工用にも適さなくなります（写真1）。誤って被害果が流通すると、消費者のりんごに対するイメージダウンは避けられません。また、台湾など本種が生息しない国にりんごを輸出する際の検疫対象害虫となっているため、万が一、輸出果実の中に生きた幼虫が発見された場合には、輸出停止などの事態を引き起こします。

従来、幼虫はふじなどの晩生品種の収穫期までには、越冬のために果実を脱出すると考えられてきましたが、最近の當場での調査結果から、一部の幼虫は収穫時期になっても果実内に残っていることが明らかになりました。幼虫が脱出していない果実は、表面に脱出口がないため、被害果であることが分かりづらい場合があります（写真2、3）。

そのため、りんご試験場ではモモシクイガの被害果を見分けるための研修会などを通じて、生産者や選果技術員の被害果診断技術向上に取り組んでいます。



写真1 幼虫と被害果実の内部



写真2 幼虫の食入孔（脱出口のない果実における被害果の識別の鍵となる）

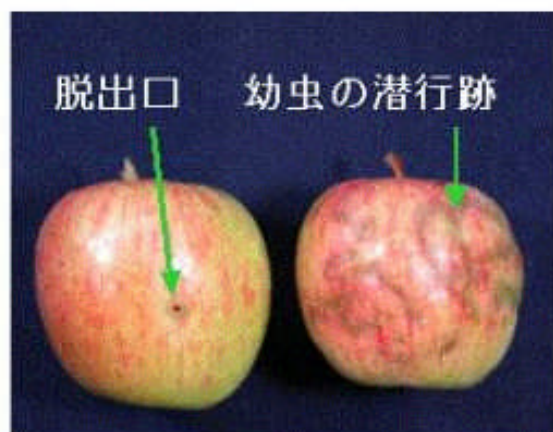


写真3 2つの被害様相（右の果実は表面の潜行跡から被害果であることが容易にわかるが、左の果実は幼虫が脱出するまでは被害果であることがわかりづらい）